

~~~~~  
書評・紹介  
~~~~~

上村勝彦著

『原典訳マハーバーラタ』1-7(全十一巻)

山 本 和 彦

本書はインドの叙事詩『マハー・バーラタ』(Mahābhārata)のサンスクリット語原典からの初めての日本語での全訳を目指すものである。

訳者は二〇〇三年一月二十四日に亡くなられた上村勝彦氏である。上村氏は本書第一巻の「はしがき」で次のように語っておられる。

「『マハーバーラタ』の英訳者 (van Buitenen) は、三冊目の訳書を出版したところで亡くなっている。『マハーバーラタ』と並ぶ叙事詩『ラーマヤナ』を翻訳されていた岩本裕先生は、二冊を出版されただけでこの世を去られた。この種の仕事は寿命をちぢめるものなのかも知れない。それにこの仕事にかかりきりになったら、他の研究活動はほとんどできないであろう。いわばこの翻訳と心中しなればならないのであった。」(本書第一巻十頁)

上村氏が始めた翻訳作業も未完に終わってしまったのであろうか。本翻訳は全十一巻が予定されていた。そのうち第六巻が出

版された後に上村氏は亡くなったのだが、その後(二〇〇三年三月)第七巻も出版されており、さらに第七巻のブック・カバーには「(以下随時刊行)」と予告されている。最終巻まで出版されるのかどうかは不明であるが、できる限り多くの巻の出版が大いに望まれる。本書の第六巻のなかに『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavadgītā)が含まれている。これは一九九二年に岩波文庫から出版されたものの再録であるが、体裁は本書と統一されている。

『マハー・バーラタ』(偉大なバラタ族)は、一詩節(gatā)が八音節四行から成るシュローカ(śloka)と呼ばれる韻律の詩節が約七万五千、さらに『ハリヴァンシャ』(Harivaṃśa)という補遺(Kaṭiā)の詩節が約一万六千、合計約九万もの詩節から成り立っている。作者はヴィヤーサ(Vyāsa)と伝えられているが、実際には紀元前四世紀頃から紀元後四世紀頃にかけて複数の人の手によって編纂・歪曲・添加されたと考えられる。メインのストーリーはバーンドゥ(Pāṇḍu)の五王子(バーンダヴァ Paṇḍava)とクル(Kuru)の百王子(カウラヴァ Kaurava)との王位継承をめぐる同族間の戦争であるが、蛇供伝説、アグニ伝説、洪水伝説などの神話や『バガヴァッド・ギーター』、『シャクンタラー』、『ナラ王物語』、『ラーマヤナ』、『サーヴィトリ物語』などの物語の挿入があり、それら諸々の作品が大きなひとかたまりの集合体と化したものが『マハー・バーラタ』である。その混沌とした雑多性はまさにインド的である。物語中のバーンダヴァの都イ

インドプラスタ (Indraprastha インドラ場所) は、現在のデリーにあったと考えられている。また神話的要素も多くあり、宇宙の始まり (本書第一巻四九頁)、ヴァドゥーサラ川の名前の由来 (本書第一巻二一〇頁)、暁の由来 (本書第一巻一四三頁)、なぜ蛇の舌は二枚あるのか (本書第一巻一七八頁)、『妻』(jaya ジャヤー) ということばや『息子』(putra プトラ) ということばの由来 (本書第一巻二八一頁、および第二巻二二二頁)、なぜシヴァが四つの顔を持ち、インドラが千の眼を持つようになったのか (本書第二巻一六七頁) など名前や物事の由来を教えてくれる。

『マハー・バーラタ』をどう読むかについては、さまざまな方法がある。対極的な二種類の方法を挙げれば、ひとつめは後世に付加・歪曲されたものを除去・修正し、『マハー・バーラタ』の原型を抽出するという文献学的な読み方と、ふたつめは『マハー・バーラタ』のなかに現れる象徴性を読み解くという神話研究で用いられる方法である。さらにそれらと同時に、『マハー・バーラタ』のなかでの史実と架空の部分との区別、それぞれの部分・内容の時代性の決定を行うことなども必要な作業である。そのためにはヴェーダ (veda 宗教的知識) からウパニシャッド (upaniṣad 奥義書)、そして『マハー・バーラタ』、さらにプラーナ (pūrāṇa 古い物語) へとという時間的な流れから『マハー・バーラタ』を読む方法と、『マハー・バーラタ』と同時代の仏教、ジャイナ教の原始教典のなかからパラレルな文章を見つけ出し、そこから『マハー・バーラタ』のなか

での意味を決定するという方法とがとられなければならない。前者の方法論は古くから欧州で行われており、いまでも盛んであるが、後者の方法論は過去あまりなされていない。

本書の底本としては、プーナ批判版 (*The Mahābhārata*, 19 vols., Critically Edited by V. S. Sukthankar, et al., Poona, 1933-1966) が用いられている。さらにニールカント (Nīlakaṇṭha) の注釈の付いたボンベイ版系統の出版本 (Ed. by R. Kinjawadekar, 6 vols. Poona, 1929-1933) が参照されており、こちらの読みか、プーナ版のヴァリアント (異読) が採用された場合には本書内では「異本」と示されている。『マハー・バーラタ』の研究書や部分訳は非常に多いが、全訳は K. M. Ganguli, *The Mahābhārata*, 12 vols. (Calcutta, 1884-1896) や M. N. Dutt, *The Mahābhārata*, 7 vols. (Calcutta, 1895-1905) との二種類の英訳しか出版されていない。この二種類の英訳と既述した van Buitenen の英訳 (原典の第五巻まで) が本翻訳では参照されている。本書第一巻から第六巻 (原典も同じく第一巻から第六巻) までは二〇〇二年一月から十一月まで規則正しく隔月で出版されており、第七巻は二〇〇三年三月に出版されたのだが、『マハー・バーラタ』一巻づつを二ヶ月という短いペースで翻訳し続けるには大変な労力が費やされたに違いない。しかし時間的な制約を受けたということは、それだけ参照された文献の数量も制約を受けたということになる。本書の「はしがき」にも参照された文献の情報がないので確かなことはわからないが、最も代表的なニールカント

(Nīlakaṇṭha) の注釈は参照されていることと思われる。

本書は初めて日本語での全訳を目指すという意味で大変期待されていたのだが、簡略化・省略が多いということが残念な点である。たとえば、『マハー・バーラタ』第一卷第八章から第九十章（本書第一卷三三九頁）まで、第一卷第一〇八章（本書第一卷四二二頁）、第一卷第一四四章（本書第二卷三〇頁）、第一卷第一五〇章（本書第二卷四〇頁）、第一卷第一五九章（本書第二卷六三頁）、第一卷第一六四章（本書第二卷七二頁）、第一卷第一七五章（本書第二卷九九頁）、第一卷第一八四章から第一八五章（本書第二卷一一三頁）まで、第一卷第一九一章（本書第二卷一二二頁）、第一卷第二二三章（本書第二卷二二六頁）、第二卷第二二三章途中から第二九章（本書第二卷三〇七頁）まで、第二卷第四七章から第四八章（本書第二卷三六六頁）までなどを始めとする和訳が省略されている。簡略・省略に関して上村氏自身が「はしがき」のなかで次のように述べておられる。

「原文では、しばしば同一人物が種々の異名で呼ばれたり、物語の聞き手に対する呼びかけが頻出することがあるが、訳文においては、読者が迷うことのないように簡略化した。……（中略）……。本訳においては、大多數の読者にとって不必要と思われる箇所は、省略した場合がある。例えば蛇の名前の列挙や聖地の名前の列挙などは、特殊な研究者には意味があっても、一般の読者にとっては単なる片仮名の長い羅列にすぎないから、省略した。」（本書第一卷、三

### 三頁）

専門の研究者はサンスクリット原典を参照できるので、簡略・省略された部分を知ることができるが、一般の読者や専門外の研究者は何が省略されているのかわからない。一例を挙げよう。本書第六卷一四〇頁九行目（MBh VI. 33. 33）で「アルジュナ」という訳語になっている箇所がある。サンスクリット原典は *śalyaśuci*（サヴァヤサーチン）であり、アルジュナのことを指しているのだが、「左利きの者よ」という意味である。アルジュナが左利きであるという貴重な情報をここで作者は読者に与えているのである。こういう情報は一般読者にも伝えておくべきであろう。

同一人物に別名が多いことや、さまざまな呼称があることはインド文学の特徴である。このことは一般の読者であっても知っておく方がよいであろう。頻繁に同じ呼びかけが出てくることで、読者の記憶に残るという効果もある。呼びかけは、登場人物の外観や特徴を知るうえで非常に貴重である。呼びかけだけで、その人物が武術に優れている点や髪の毛がどうであったとか、どういう家系なのか、誰と親族関係にあるのかということが非常によくわかるのである。

さらに、名前は何らかの象徴性を持っており、その象徴性を解き明かすことが神話研究の方法論のひとつでもあるので、簡略・省略があると原典を参照しえない他の専門の研究者にとってはせっかくの現代語訳を十分に活用しきれないことになってしまう。一見無駄に見える記述であってもそれは物語のなかで

何らかの効果をもたらしている。そういうところに原作者の個性が表れてくる。

本書に注記もインデックスもないことは紙面の制約もあり、一般読者を対象とする文庫本である点からすれば仕方のないことである。本書の目指すものが原文に忠実な直訳ではなく、平易な意識である点を考えれば批判されるべき点は少ないのかもしれない。本書には各巻の冒頭部分に「家系図」、「主要登場人物」、「マハーバーラタ関連地図」が掲載されており非常に便利である。さらに、『マハーバーラタ』の全訳となれば、これによって古代インド人の精神世界を知ることができ、非常に大きな価値がある。

(ちくま学芸文庫 二〇〇二―二〇〇三年)